

李長之

著

魯迅批判

南雲智

訳

李長之
著

魯迅批判

南雲智
訳

徳間書店

李 長之(りちょうし リー チャンチー)

一九一〇年、山東省生まれ。

一九三六年、清華大学卒。在学中の三十五年、本書『魯迅批判』を発表、注目を集めた。

新中国成立後は五七年のいわゆる整風座談会における忌憚のない発言がもとで『右派言論』『反党反社会主義』の烙印を捺され社会的に抹殺された。文化大革命では労働改造隊に入れられるなど、約二十年の空白の後、四人組打倒を経て再び執筆の自由を得たが七八年一二月、北京で病没。三カ月後の七九年三月に名誉回復した。

南雲 智(なぐも さとる)

一九四七年、新潟県生まれ。

一九七六年、東京都立大学大学院人文科学研究科博士課程単位修得の上、満期退学。中国文学専攻。現在、東京都立大学人文学部助教

授。
『魯迅と『地底旅行』』ほか論文多数。翻訳に『魯迅全集』(学習研究社)の『日記篇』全三巻など。

(現住所)横浜市緑区榎が丘一四一五一〇七

魯迅批判

初刷 一九九〇年五月三十一日

著者 李 長之

訳者 南雲 智

発行人 荒井 修

発行所 (株)徳間書店

東京都港区新橋四一〇 千105-55
電話 〇三ー四三三ー六二三二
振替 東京四一四四三九二

印刷所 図書印刷(株)

近代美術(株)

製本所 ナショナル製本協同組合

落丁・乱丁本はお取りかえいたします。

(検印廃止)

■ 魯迅批判／目

次

三版題記·····	7
序·····	13
一 序言——魯迅的思想性と環境·····	17
二 魯迅の生活と精神發展上の諸段階·····	27
三 魯迅の作品の芸術的考察·····	89
(一) 魯迅の創作の一般的考察ともつとも完璧な作品·····	91
(二) 「阿Q正伝」の芸術的価値とその新評価·····	109
(三) 魯迅の作品における抒情成分·····	123

(四) 魯迅の文芸創作における失敗作	143
--------------------	-----

四 魯迅の雜感文	153
----------	-----

五 総括——詩人と戦士の魯迅……その本質と批評	201
-------------------------	-----

後記	234
----	-----

訳者あとがき	261
--------	-----

■装丁／川畑博昭

魯迅批判

三版題記

本書の脱稿は、〔民国〕二十四（一九三五）年で、翌二十五年に初版が刊行された。それからわずか一年足らずで、魯迅^{ルンセン}先生が亡くなられてしまった。

魯迅先生には印刷前の原稿に目を通していただき、多大なご助言をいただいた。また先生ご自身に著作執筆月日の誤りを訂正していただいたほか、近影の写真も一枚送っていただいた。⁽¹⁾その写真は、葉書大のもので、裏返すと厚紙からはがしたあとが残っていた。出版社にはこの写真を原寸大で表紙に出してくれるよう頼んだ。

脱稿からすでに七年余が過ぎており、本来ならば、修訂が加えられるべきかもしれない。また一人の人間の存命中に、その評価を定めることは難しく、周囲から批判されるのを避けるため、論調を抑え、死後、あらためて真正面からきりこむものだ、というのが「世間一般の常識」というものだろう。しかし私自身は、その必要はないと思っている。初版の序文で、私は、すでにこう書いている。「意図は、簡単だった。全力を尽くし、いささか自信と責任の持てる見解を引き出し、科学的な研究と同じように、一つの真実追究の結果を報告する、というものである。これが

批評者の唯一の態度だと信ずる」。この態度は、今もまったく変わっていない。真実を追究するのだから、たとえどんな場合でもためらう必要はないし、是々非々を明確にすれば、後悔すること、その人間の死後に書き直すこともないのである。日頃から消しゴムというものが嫌いな私は、誤りは誤りとして、そのままにしておけばよいと思っている。したがって今回の重版にさいしても、一字一句たりとも書き改めることはしなかった。ただ一つ残念なことは、本書で、魯迅先生の生命が終末に近づいていると書いたが、それが不幸にして的中してしまったことである。

ところで、重版するにあたって、当初は『魯迅全集』を買い求め、引用箇所のページ数をすべてこれに合わせるつもりでいた。ところがその値段たるや、ある書店などでは、なんと七千元という、とても手が出ない値がついていたのである。こうした書籍を手元に置きながら、自分では読まず、また貸すこともせず、「蔵書とは積んでおくものにして、読むためにあらず」という時代遅れの考えを、後生大事に守りつづける人間がいることも知っていた。そこで、できそうにもないことは考えないことにした。

そのほかに、なんとか本書の紙型を大きくしたいという希望も持っていた。だがそれは、本来の姿を失うことにつながり、将来、『魯迅再批判』を書いたほうがよさそうだとすることに気づいた。いづれ意欲が湧いてきたら、筆を執るつもりでいる。

本書の出版後、国内ではさしたる反響もなかった。だが、これは予想できた。というのも、魯迅のすべてを洗いざらい出したために、ひたすらすばらしいと考えている（すっかり偶像化して

いる）人や、逆に、ひたすら否定せずにいられない（死んでもなお余りあると考えている）人を失望させたからである。意外にもこの本に注目したのは、われわれの敵だった。出版後まもなく日本の『中国文学研究』が紙幅のほぼ半分を費やして、この本を紹介したのである。章節ごとに概要を記し、フンボルトの方法論に依拠した、と私が「後記」で書いたことも見落としていなかった——あるいは敵は、想像を絶するほど真面目なかもしれない。北平（北京）陥落後、ある雑誌に敵が公表した発禁処分⁴の書籍が掲載されたが、本書もその一冊にあげられていた。

本書は最初、北新書局から出版されたが、刊行後、この本屋の主人にまんまとしてやられたことに気がついた。一つは、表紙に載せた先生の写真は、なかにも一枚入れることに話がついていたはずなのに、目次にだけ「魯迅先生近影」の空手形を入れてるにすぎなかったからである。しかもこの写真は、製版後、返送してくれるように、と早くから頼んでいたのに、とうとう行方不明になってしまった。つぎに、魯迅先生の私宛の手紙を本書に載せるつもりで、北新書局に渡し、目次にも「魯迅先生手蹟」の項目を入れた。ところが結果は、手蹟は見当らず、これまた空手形だけが残ってしまったというわけである。——手紙それ自体が行方不明になってしまったのである。支払われた印税となると、劣悪そのもので、たった五十数元、しかも一度だけだった。ただ一つだけ満足できることは、表紙が私自身の装丁であること、ページ数も私が指示したもので、注を下につけたのは、ドイツの本が好きだったことから、それをまねたというしだいである。本書が出版された翌年、香港に立ち寄ったとき、書店には第二版が出回っていた。今回のもの

を第三版としたのは、そのためである。こちらに帰ってきてから、昆明と成都でも偶然、数冊見かけたが、まもなく見かけなくなってしまった。今回、第三版を出す気になったのは、下の弟が古本屋で、背表紙がすっかりぼろぼろになったものを元の三倍以上の値段（当時、書籍が値上がりする理由はなかった）で買ってきてくれたからである。それをずっと手元においていたあいだに何度か、ある雑誌（たとえば『七月』⁽⁵⁾など）が広告を出して、本書を求めていた。しかし私は、知らぬ顔の半兵衛を決めこんでいた。というのも、私自身、この本一冊しかなく、正直言つて惜しかったからである。

七年余りの時が流れたにもかかわらず、系統的に魯迅先生を論じる書籍が現われるように、という私の期待は裏切られた。どれもが他人の文章の寄せ集めであつたり、残り飯を炒めるように、ただ先生の原文を順に配列したにすぎないものばかりだったからである。このため、私は、いっそ勇気づけられ、このささやかな書物を重版する気になったというわけである。願わくば、重版後、すぐにもより優れた評論が現われ、本書に取って替わるようにと祈つてやまない。

〔民国〕三十二（一九四三）年三月三日

旅の途次、成都にて 長之記す

（一）近影の写真も一枚送っていた——『魯迅日記』で見るかぎり、李長之^{リナシノ}が初めて魯迅に手紙を出したのは、一九三四年十二月三十日である。それから半年後の一九三五年七月、李長之は、自分が『魯迅批判』執筆中であることを魯迅に告げるとともに、自伝を書くよう勧める手紙を出したらしい。これに対して七月二十八日付の返信で、魯迅は、『魯迅批判』

が天津の『益世報』に連載中であることを知っている、自伝執筆の提案には賛成しかねる旨の回答をしている。八月三十一日、李長之の求めに応じて、写真一枚を送付したことが『魯迅日記』には記されている。また九月十二日付の李長之宛の手紙では、魯迅が出版した画集と翻訳書の出版年と出版社についての李長之の質問に答えている。二人のあいだで、あるいはほかにも手紙の往来はあったのかもしれないが、『日記』で見えるかぎり、魯迅が李長之から手紙を受領したのは七回であり、返事を出したのは三回である。

(2) 一字一句たりとも書き改めることはしなかった——訳者が気づいたかぎりでは、「後記」の人名で、「露薇」(初版)が「文華」(三版)に書き改められている。

(3) この本を紹介したのである——李長之がいう『中国文学研究』とは、竹内好編集の『中国文学月報』(発行所、中国文学研究会)第二十号(一九三六年十一月一日刊)のこと。この第二十号は「魯迅特輯号」だった。『魯迅批判』の紹介とは、吉村永吉「李長之の『魯迅批判』——北新書局」のこと。「紙幅の半分を費やして」というのは、やや誇張が過ぎるが、約三分の一(十ページ)ほどをこの紹介にあてている。

(4) 北新書局——『語絲』の編集責任者にもなった李^{リッシャー}小峰が一九二五年三月、魯迅の援助のもとに北京に創設した書店。一九二六年に上海支店を設け、一九二七年春、本店を上海に移した。

(5) 『七月』——一九三七年九月、上海で胡^{フー}風によって創刊された。週刊で三期発行したのち重慶に移り、十月から半月刊誌として一九三八年七月、三集十八期で停刊。十カ月余ののち月刊誌として不定期刊で十期刊行した。胡風の一貫した編集方針により、「抗日戦争期の戦闘的文芸形式」に力が入れられ、詩や劇、報告文、版画などに重きが置かれた。

序

筆を執ることを思いついたのは、去年（一九三四年）の春のことだった。当時、中国では作家論というものがまだ盛んではなく、編集者も読者の関心と呼ぶものとは捉えていなかった。それにもかかわらず、私は、青年に強い印象を与えている中国の数人の作家について、それぞれ一人ずつ批評を加えようと急に思いついたのである。無論、そのなかには魯迅先生も含まれていた。

意図は、簡単だった。全力を尽くし、いささか自信と責任の持てる見解を引き出し、科学的な研究と同じように、一つの真実追究の結果を報告する、というものである。

これが批評者の唯一の態度だと信ずるが、なかなか思うようにはならないものである。最初に完成させたのが茅盾^{マオトン}についての論文だった。ところが、この論文がまったく私の興味をそぐ結果となってしまった。

書き始めた当初はまだ、『文学季刊』^①に親近感を持っていたが、ちょうど草稿ができあがったころに、巴金^{パキン}先生がたまたま「批評文は落花生を包むの論」^②という一文を発表したのである。なぜか私が雑誌で彼を攻撃すると思いこんだらしく、終日、疑心暗鬼に陥り、さらには一群の神経過

敏で、しかも誠実な彼の友人たちをそのかして、陰に陽に圧力をかけてきたのである。また間接的だが、ちっぽけな雑誌の編集者の鼻息をうかがう原稿書きが、私を罵る文章ならば掲載されやすいとみて、うっぶん晴らしの目標としたのだった。しかしその挙動は、すべてかまびすしく騒ぐばかりで、たいしたことはなかった。しかも、私を不愉快にすることが目的だったので、相手にしなかった。

ところがその余波は、その後も広がっていき、勢力はずっと小さくなったとはいえ、今なお終束していない。

話を戻すと、当時、そんな空気のなかで歓迎されない雑誌に文章を載せる気持にはなれなかった。人びとに自分の書いたものを読んでもらいたいとは思うが、卑屈になれるほど無神経ではなかったので、原稿を取り戻し、思いきって『文学季刊』から離れた。

その後、『現代』³から原稿を求められ、掲載するばかりになったとき、雑誌がつぶれてしまったのである。しかも真偽のほどはわからないが、私の原稿が差し押えられたということだった。⁴再三にわたって問い合わせしてみたものの、いよいよ行方がわからなくなっていた。昼夜、心血を注いだ四万字余の評論は、書き写しを頼んでおくほど金銭的余裕がなかったので、二度とお目にかかれなかった。

こうしたことから同様の評論を書く気になれなかった。そのうえ作家論が大いに溢れ始め、しかもそれぞれがおおむねそれなりに意義があるものだった。賑やかな場所からは遠ざかりたがる